

Once upon a time in Utsunomiya

一枚の絵葉書から 石井敏夫コレクションより

第75回

歩兵第66連隊歓迎記念絵葉書。
明治41年3月30日のスタンプ



歩兵第六十六連隊

一九〇五(明治三十八)年四月、政府は日露戦争の際に創設した第十三、第十四、第十五、第十六の四個師団常設を決定し、それら師団の衛戍地を求めていた。この情報を得た宇都宮市は軍人保護義会を中心に積極的な誘致を展開。同年十二月十八日、県議会は「師団設置に関する意見書」を可決し、白仁武栃木県知事に提出した。また、県議会は一九〇六(明治三十九)年にも再度、「駐营地敷地は県より寄付する旨」を明記した「意見書」を提出している。「宇都

宮市史」宇都宮市)

第十四師団の宇都宮駐屯が軍令により正式に決定したのは一九〇七(明治四十)年九月十八日。市が師団設置の用地買収のために募った陸軍省への寄付は五万五千三百二十七円三十銭に達した。翌年三月、各部隊に先駆けて歩兵第六十六連隊が到着。初代連隊長は及川恒昌大佐だった。この日から宇都宮は「軍都」の道を歩むことになる。

「昔日の宇都宮」(塙静夫、石川健/随想舎)によれば、当時の「下野新聞」記事を引用し、「二十一発の花火が打ち上げられる中を、知事や市長など県官・市吏員が出迎え、茶菓の接待後、「沿道の市民数万が唱える万歳の声や、振り立てる国旗の中を市中行進」と、その熱狂振りを伝えている。

同連隊は第十四師団の宇都宮駐屯とともに誕生した部隊で、近衛歩兵第二連隊、新潟県新発田は歩兵連隊から選りすぐった精鋭千五百人で編成されていた。駐屯地は市西北部郊外の四十七万坪にのぼる原野で、現在の中央女子高付近



歩兵第66連隊営門と立哨する兵隊。奥に兵舎が見える



営庭に整列し、軍旗を拝受

にあたる。

シベリヤ出兵などで名をかせた第六十六連隊であったが、一九二五(大正十四)年五月二十五日、ワシントン条約の軍備縮小により廃止された。このとき廃止された師団に、第十三師団(高田)、第十五師団(豊橋)、第十七師団(岡山)、第十八師団(久留米)がある。